



TITLE:

Comédie Humaineにおける「愛」について

AUTHOR(S):

黒崎, 靖子

CITATION:

黒崎, 靖子. Comédie Humaineにおける「愛」について. Francia 1962, 6: 55-64

ISSUE DATE:

1962-12-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137483>

RIGHT:

Comédie Humaine における「愛」について

黒 崎 靖 子

▲愛が情熱の中で第一の位を占めるのは、あらゆる情熱を同時に満足させるからだ▼（「結婚の生理学」）

▲愛は宿命的に、人間の中にある偉大なものの一切であり、人間の思考から発する一切のものである▼（同）

情熱こそ人間のすべてである、と考えた Comédie Humaine の作者は、二十年の文学生活を通じて、ロマン派の恋愛至上主義者たちに劣らぬ熱心な愛の探究者であった。Comédie Humaine 全作品から、愛に全くふれることのない作品をぬき出すことは困難である。そこには、およそ人間の愛のあらゆる相が描き出されている、といっても過言ではない。

ロマン主義の影響は、当然このテーマの上に著しくあらわれ、Comédie Humaine の愛に *romantic, sentimental* な傾向を強くした。夢想や回想を母胎とし、自然と *correspondance* をもち、神秘的な雰囲気の中に描かれる愛（特に「谷間の百合」、「呪われた子」など）には、同時代のロマン派作家たちとの深い類縁関係を思

わせるものがある。¹ だが、Comédie Humaine に描かれた愛は、*romantic* な表現とは対照的な暗い運命をもった。愛と幸福とははっきり区別され、幸福を得た愛はごくまれに、エピソード的にしか描かれていない。そして、愛の讃美者の口調が *pessimiste* な *misogyne* の口調に変わって愛を否定する。

▲愛など、情熱の中で一番卑しい軽蔑すべきものです▼（「結婚の生理学」）

こうした矛盾や疑問を、バルザックは彼の▲結果↓原因▼の説明法を愛の場合にも用いて、説明しようと努めたのだった。

1

晩年の作品に属する「二人の若妻の手記」（一八四一—二）は、情熱の最高のあらわれとしての愛に関するバルザックの考えを総括し▲原因▼を明示した特異な作品である。▲愛は、神の姿にかたどられたあらゆる道德の原理をなすもの▼というリースは、Comédie

Humaine の愛を求めて生きる人々の先頭に立ち、romanesque な至上の愛を求める。第一の愛人マキユメルも、第二の愛人ガストンも、資性、環境すべての点で愛にのみ生きることのできる稀なる男たちだったので、《愛の天才たち》の絶対的な愛が実現される。だから、マキユメルの死、ルイーズの死に終る不幸な結末の原因は、外的障害でも心の離反でもなく、愛の情熱そのものにあつた。

《あたしの死は残酷な教訓を含んでいます。結婚は、情熱の上に築くことはできません。愛の上にさえてできないのです》

ルイーズの最後のことは、平凡な結婚をしてルイーズと反対の立場からルイーズを批判するルネの折々のこととともに、愛の情熱は社会生活に適さないものだという、モラリスト・バルザックの考えを強くあらわしている。全体としての調和、統一、という観念はむしろ本性的なものであるが、バルザックはそうしたモラリストの使命を自己に課し、ロマン主義者たちからわかれてボナルド・メストルら反動的思想家の列に加わった。秩序の保持はまず、社会の構成単位としての家族制度の擁護であり、バルザックもこれに和して、《家庭は人類のもつとも偉大なものだ》（二人の若妻の手記）と推賞した。だが家庭の前提である結婚の制度は、ルソー流の社会批判者バルザックが、社会は悪を内包しており、自然の法則と根本的に対立するものであると考え、その対立の最もはげしくあらわれている場として「結婚の生理学」以来たえず問題にしていたものだった。

エゴイズムと利害のみの社会で行なわれる結婚は、財産と爵位の契約にすぎない *marriage de convenance* だったがとにかく法律によっても宗教によっても正当化され、無視された感情の苦悩を残

した。わけでも、男よりはるかに不利な立場の女にとって、結婚生活とは売春婦に等しい屈辱を強いるものだった。（デーグルモン夫人——「三十才の女」オノリーヌ——「オノリーヌ」）姦通がこのような結婚制度の落し子となり、名前だけを共通に別々の生活をして世間体だけは守るといった男女の關係がいたる所にあつた。（特に「ゴリオ爺さん」）こうした社会における真の偉大な情熱の稀少価値をバルザックは強く感じ、詩的な崇高な姿のうちに描いたのであるが、それは、同じバルザックの内なる観察家、モラリストの方向を妨げるものとはならず、romantique バルザックからいえば矛盾した結果を生んだ。世間体を守る虚偽の生活への顧慮を失ったボーセアン夫人の情熱は、愛人の *marriage de convenance* に裏切られたが、それは社会の掟を破ったため社会から加えられた罰として示される（「ゴリオ爺さん」「捨てられた女」）

《社会は自然と同じく妬心の強いもの、その掟を犯すものを決して見逃しません》

ルネのことは *Comédie Humaine* 中になりひびく、モラリスト・バルザックの声である。それは、清らかな娘の恋を心変りした相手の、*marriage de convenance* に裏切られるウージェニー・グランデの場合のように、利害のためには愛など敵愾の如くする現実の社会のすがたによって裏づけされている。

バルザックの愛の情熱は、《あるかないかどちらか、あるとしたら広大無限》という形であらわれ、はげしい排他性、独占欲をもって絶対的な所までもえ上っていくものである。そのような愛に、社会と調和したすがたはあり得ない。さらに、社会をはなれた人間に存在意義を認めないバルザックは、社会をはなれた別天地に生きる

愛を描くことはできない。そこで *Comédie Humaine* の愛は、社会生活の中で裏切りにあうか、社会の掟に反抗して戦いその罰をうけるかの二者択一の運命をもつのであり、一方に、*marriage de convenance* や馴れ合いの姦通を伴った結婚生活が、とにかく社会の秩序に従っているので罰をうけることなく、あるいはニュッゲン夫妻とラスチニヤックの場合のように「ゴリオ爺さん」「ニュッゲン銀行」むしろ栄えているため、不幸な、*pathétique* な姿を示すのである。

2

社会の存在を無視し、またそこから逃避して愛のみの世界に生きようとしたルイズの場合も、社会の罰という意義はもっている。しかし、このようなまたなき愛の設定は、さらに別の観点から愛の情熱の性質を考察するためのものであった。

▲あの気の毒なマキユメル男爵夫人のまねはしないようになさい。極端な愛は、何ものをも生まず命とりになるのです▼（ベアトリックス）

Comédie Humaine の一人物はルイズの愛の性質を要約して云った。ルイズの不妊の苦しみ、マキユメルの消耗死、ガストンとの愛の生命の短さを初めから予感しながら熱狂的に愛し、事実無根の疑惑につきまとわれて自ら生命を絶つルイズの姿、それらは、愛に援用されたバルザックの *énergie vitale* のシステムを示すものである。

流行の医学知識や用語をさかんにとり入れているこのシステムに於て重要なことは、生命もまた二元論的に説明され、特にその危険性、破壊性が重視されて *usure vitale* の問題を生んだことである。

▲生命の持続は、人がパンセ（生命エネルギーのあらわれ）に對立させ得る力次第である。生命とは灰をかぶせねばならない火だが、パンセすることは火に煙を加えることになる。パンセとは何かというと、情熱、悪徳、はげしい仕事、苦痛、快楽、これらはパンセの奔流なのだ。激しい *idée*（パンセから *idée* に移る）をある一点に集中させると、人間は短剣でさされたようにそのために死んでしまう▼

ルイ・ランベール、バルタザール・クラースなど、一連の天才たちの破壊の姿の中に描かれたこの理論は、▲絶対なるものはすべて悪しきものである▼という原理を導き出し、情熱に対するバルザックの二重の態度を生んだ。マキユメルもルイズも、情熱によって身をほろぼすバルタザールの人々である。

自ら子供を生まず、夫を死なせるルイズの愛が、実を結ばぬ美しい花、砂漠の砂、極地の冷土にたとえられたのは、やはり *énergie vitale* の▲創造▼という觀念からである。バルザックが、意志というものにあらゆるものを越えて優先的な位置を与えたのは、生命エネルギーを意志の力で調節することによって、寿命も、偉業も、幸福も、人間は自ら▲創造▼することができるという考えからだった。

Comédie Humaine の中の幸福な愛と結婚の例を見ると（セシール夫妻——「幻滅」、ルネ、ユルシユール・ミルエ——「ユルシユール・ミルエ」など）みな、社会秩序の中で理性と意志により情熱を調節するという、形の上では *classique* によく似た理論を含んでいることが分かる。ルイズに比してルネの姿がたたえられるのは、諦めと忍耐の結婚生活の中で▲生命のエネルギーに拍手を送り▼、▲生命の泉▼となって周囲のものをうるおしながら、徐々に確実に

幸福を築いていく「創造」そのものの姿だからである。

生命の観点から、愛の情熱にはあらゆる不信の烙印がおされた。愛は間歇的な性質をもっていて、長続きのしないものである。「二人の若妻の手記」確信を与えることのできない愛は、友情以下のもういらいらないものである。「幻滅」。愛と憎悪という、情熱の中で最もはげしい二つの感情をくらべてみると、憎悪の方が強力で、より長い生命をもっている「従妹ベット」。さらに、絶対の高みに達した愛は、憎悪や復讐の感情に移転してしまう性質をもっている「従妹ベット」。それは、「自然の一時的狂気」(二人の若妻の手記)にすぎないものである。結局愛の情熱を母性愛的感情におきかえる、ということが、モラリスト・バルザックと生命の哲学者バルザックの最も心になつた考えとして示される。

3

ルイーズの愛は、ロマネスクな熱狂的な外貌の裏にきわめて暴虐な姿をもっていた。

「愛には、命令する愛と服従する愛と二つの種類があるのです」

愛人——「おお、これこそはあたしが足許にふみにじらねばならぬ敵なのです」。ルイーズにとって愛するとは、愛以外の一切のものを占め出した絶対的な愛の王国の中で、女王として愛人を完全に所有し支配するため闘うことだった。愛人の心を試しては満足するルイーズの側らで忠実な奴隷となつたマキユメルは、愛したために小さな人間になつてしまった自分はやがてその為に輕蔑され捨てられるだろうと不安をおぼえながら、消耗して死んでいく。「愛とは、本質的にエゴイストなものだ」(「セザール・ピロトール」)と

いうバルザックは、男女の愛を二つのエゴイズムの間の闘いと考へた。「愛されんと欲するなら愛するなかれ」(二人の若妻の手記)、これが愛の原理であつてあらゆる打算や術策が愛にはつきものである。完全な奴隷となる服従者は、愛の闘いにおける犠牲者である。マキユメルを死なせて後ガストンに盲目的な服従者の情熱をそそいだルイーズは、やはり死への道をたどつた。

ロマン派の作家たちよりもむしろボードレールの方に近いこうした愛の残忍な性質は、ランジエ公爵夫人とモントリヴオーの場合が一つの例となるように、Comédie Humaineの愛に外的障害による挫折ではなく男女の心理の本質的ずれに終る運命をあたえた。裏切りは、Comédie Humaineの愛から切りはなせない。あるいは社会環境が投影し、あるいは人間の本性から発し、バルザックの考察した男女のエゴイズムは深く不屈の形であらわれ、愛の犠牲者たちは死にまで追いつめられるか修道院に隠遁するか悲惨な末路をとり、辛い体験を人生教育として立ち上り社会に参加していくことのできる青年たちだけが、鋼鉄の性格の持主に変身して生きのこる(たとえばウージェニエ・グランデ、アンリー・ド・マルセー「続女性研究」)。バルザックは愛を、社会の法の及ばぬ魂に対する証人なしの犯罪として愛と復讐の欲望とを結びつけた。愛と復讐はComédie Humaineの強い性格をもつた人々の心中に入り乱れ、いたる所に「オセロの復讐」の叫びがあがる。

愛のエゴイズムという性格は、バルザックの心につながるものである。

「才能のある人が愛する時には、もうものを書いたりしなくなるはずだ。それでなければ愛しているとは云えません」

ルイズの愛の独占的な支配的な姿には、バルザックの反抗がうかがわれる。Comédie Humaine の中で愛に殉じた男は、亡命貴族で社会的な道につくことを禁じられているマキユメル一人であることは注目すべき点をもっている。《男というものは行動し、仕事と生活を果たすために生れついているのだ》(「ランジェ公爵夫人」というのがバルザックの確固たる信条なので、修道院入りをする男、愛に全く身を献げる男は女々しい男だという感情がバルザックの心にはひそんでいる。

《僕には愛と栄光と、ただ二つの情熱しかない。どちらもまだ満たされない。決して満たされないだろう。》

青年期の初めにつぶやいたこの言葉は、彼の生涯の縮図、予告であり、対立した二つの欲望のために彼の生活とエネルギは二分されてみたされることがなかった。usure vitale の意識はこのようなバルザックの生活から生まれたものであり、そこで仕事と愛との相剋が大きな問題となった。

それは芸術家たちの場合に特にはっきり描かれる。Comédie Humaine の天才的な作家ダニエル・ダルトスは不屈の意志の持主で、迫害や貧困には動じなかったが、愛した時は彼の作家としての生命の終る時だった(「カディニャン公妃の秘密」)。才能はあるが意志の弱い危険な性質をもった彫刻家ヴェンツェスラスの場合、幸福な愛と結婚が芸術家としての大成を妨げるものとなった。

《オルタンスは、自分の愛の競争者である「彫刻」にこうしてうち勝つことのできたのを誇りとせずにはいられなかった。その上に女の愛情は、美術の神を退散させ、仕事にふけるものの獷猛な、兇暴な剛毅そのものの意志をたわめてしまう》(「従妹ベット」)

Comédie Humaine の最も幸福な、理想的な男女であるセシャル夫妻の場合も(「幻滅」)、ダヴィッドは幸福のために大発明家になるうとする年来の野心をあきらめた。一方のためには一方の欲望を断念し放棄しなければならぬ。バルザックがひそかに愛の欲望よりは栄光、権力の欲望の方をえらび、あるいはえらぶことを希望したことは、Comédie Humaine の両端の最大の権力者マルセーとヴォーランの愛に対する軽蔑、無視の態度にあらわれているが、それは Comédie Humaine の初めから終りまで misogynie の口調となつて、愛を描く時のバルザックにつきまとつた。

ここに、母性愛が、唯一の完全な理想的な愛の姿としてうかび上ってくる。この愛のもつあらゆる美点の中でも、バルザックが特に讚美したのは献身という性質である。

《献身よ、お前は愛以上のものではないか？ お前は抽象化された volume であり生みの力をもつ volume であるが故に、何よりも深い volume なのではないか？ おお献身よ、お前は結果以上の能力ではないか？》

バルザックはこの無私の愛を、世界の創造者である神のものであり、人間では他には芸術家のみが知ることのできる《創造者のよるこび》という栄光で飾り、Comédie Humaine の世界の大きな力とした。愛の欲望が人間の本能である限り、女を愛し得ぬヴォーランも、妻を失ったゴリオも、不幸な結婚をした女たちも、抽象化された欲情の中に生きることができぬからである。それは宗教的感情にもつながる愛であり、この愛に生きる人々をバルザックは殉教者のように描いた。

フェリックスは、モルソフ夫人との心身をすりへらすような愛の

体験ののち、このような愛を求めた。

▲苦しみ悩む人々の側で、選ばれた女性は一つの崇高な役割を——傷口に包帯をあててくれる尼僧の、子供を許してくれる母親の役割をつとめてくれねばなりません▼(谷間の百合)

女を解放することは女を墮落させることだ(三十才の女)、と女性解放論者を揶揄したバルザックの意図はここに向うのだが、男女の間のこのような愛の成功を現実の社会の中に描くことはできなかった、

4

一八三三年頃から一八四〇年頃にかけて、唯一にして永遠の愛という image がいくつかの作品にあらわれてくる。¹⁰バルザックの romanesque な傾向と poétique な才能とを総動員して美しく描かれるこの彼岸の愛は、人間の愛の本質についての哲学的ともいえる探究を示すものである。

愛の不幸はすべて情熱に帰されるものとして、バルザックはまず情熱と真の愛とはっきり区別した。

▲愛と情熱は、詩人も社交界人士も哲学者も馬鹿者もたえず混同しているが、異なる二つの精神状態なのだ▼(ランジェ公爵夫人) 情熱は苦悩と推移を意味し、希望が死ねば消え失せるが、愛には確実なよろこびと永遠の生命がある。情熱は生涯にくつこともつことができるが、愛は人間の生涯にただ一つしかないものだ。こうした比較考察の後、真の愛は次のように描かれる。

▲高貴な感情、偉大な些事、詩、精神的感覚、献身、道徳の花々、魅惑的な調和などにみちみちた、卑俗な粗野な世界のはるか高みにある理想の王国、そこへ二人の人間は、結ばれて一人の天

使となり、快樂の翼に運ばれて飛んでいくのだ▼(ベアトリックス)

▲人間の生涯に二つの愛はない。ただ一つ海のように深く運べない愛があるばかりだ。(……)この愛はハイネのすぐれた表現によれば la maladie secrète du cœur とよばれるもので、我々の中にある無限の感覚と、目に見えた形であられる美の理想との結合である。つまりこの愛は、創造物と創造を同時にもっている。(……)真の愛には二つの型しかない。スコットランドの透視力の結果であるにちがいない一目ぼれか、プラトンの両性具有者を実現する両性の徐々の融合か▼(ボエームの王)

あるいはキリスト教的な、あるいは神秘的な理想で美化されているのは、肉の欲望、快樂である。快樂はバルザックの描く愛では常に重要な位置を占めていた。天使のような少年少女の詩的な愛の場合にも(呪われた子)肉体の結合は忘れられず美しく描かれる。愛のない理性結婚をしたルネの場合には、ルイズの情熱の愛に劣らぬ快樂を与えるための、不自然なほどの努力がなされた。いわゆるプラトニックな愛は Comédie Humaine の中にはみられない。十八世紀の快樂主義やゴーチエらの審美主義の影響をうけて、バルザックは快樂主義的な官能の愛をも描いた。しかし、欲望と愛とは厳しく区別され、官能だけの愛は、フェリックスにおけるモルソフ夫人に対するダドレー夫人の姿のように一段低いものとして描かれている。つまり、真の愛とは、欲望の塊りである情熱とは異なり▲地上の愛の欠陥である欲望▼(呪われた子)を精神的理想に結びつけて完全な姿にならねばならないという考えが、バルザックの愛に

対する態度の根底にあるのである。

快樂は、バルザックにとつて、愛の幸福のための必要条件であつたが、同時にその欲望は男のエゴイズムの根本をなすものとして、男女の間に深みぞをはるものであつた。オノリーヌとボーヴァン伯爵、モルソフ夫人とフェリックスのようになすぐれた男女の間では、それは人間性の深淵を思わせる深刻な問題となつてゐる。

Troubadoursの昔から詩人たちが憧れうたいつづけてきた官能の愛の理想化ということをバルザックも愛の探究の最後の目的としたが、それには独自の原因考察が加えられた。青年リュシアンを愛した娼婦エステル（「浮かれ女盛衰記」）にみられるように、娼婦たちには、清らかなもの聖なるものへの憧れ、唯一の愛に身を献けて贖罪し新しい洗礼をうけ、神に近づきたいという強い願望が秘められており、悪徳の底から美しい理想へ向つて上昇しようとする人間の欲望を示すのであるが、一方、カリストのような（「ペアトリックス」）清純な環境に育つた純真な青年は、美しく聰明で、夫を献身的に熱狂的に愛している妻をもちながら、自分にふさわしくない女、真心をもたずさまさまの手管で苦しめる娼婦的な女ペアトリックスに、不可解なまでの情熱をそそいで執着する。それは、理想的な好配を得ても満足できない人間の心の謎とされている。

娼婦たちと反対にすぐれた男や貞淑な女の心には悪への欲望がひそんでゐる。人間すべてにみられるこの対照的な欲望は、

▲一方はまだ消えつくしていない神の光の最後の残映、一方は人間の原始の泥の名残り▼（「ペアトリックス」）

で、人間性に帰着するものであつた。青年時代からバルザックが苦しんできた、人間における精神と物質との対立というテーマは、

Etudes Philosophiques のさまざまの知的冒險となり、「ルイ・ランベール」「セラフィタ」において、スエーデンボルグの神秘思想を究極のものとして体系的に完成し、▲二重性の人間▼という人間観をつくりあげた。

▲人間は、物質と精神で作られてゐます。獸性は彼のうちに終りを告げ、天使は彼から始まります。そこからあの闘争——予感される未来とまだ完全にぬけきらぬ従前の思い出との間の、われわれすべての人間の経験するあの闘争が生まれるのです▼

（「谷間の百合」）

天上の世界に憧れて上昇し、また悪の淵にまねきよせられて交錯する人間の限らない欲望と苦悩。Comédie Humaine に métaphysique な意義を与え、contraste を主とするバルザックの美学の極致を示し、Comédie Humaine という「神曲」にくらべられる唯一の叙事詩の魔術的な源泉となつてゐるバルザックのこの人間観は、社会に對して、さらに愛するものの間で、常に▲闘い▼という形であらわされてきた愛に、最後の▲闘い▼を課するものとなつた。

この闘いを男女の両側から描いた「谷間の百合」では、フェリックスは、理想の愛の対象と官能の愛の対象を一人の女の中に結びつけることができず、両者の間を永遠に彷徨する男の運命を示した。そのさらに宿命的な姿は、ユロ・デルヴィル（「従妹ベット」）に見られる、一方モルソフ夫人が魂の苦しい闘いを経てたどりつくのは肉の愛の理想化という問題をはなれて、人間的な愛を捨てて神の愛をえらぶことだつた。

▲宗教のみが、熱烈に詩的に東邦のメランコリーをもつて、かかる situation を表現しうるのだ▼

モルソフ夫人において問題は、キリスト教徒としての貞節と肉の誘惑との闘いにうつされた。理想の女である夫人にフェリックスがのぞむものをかなえることは、モルソフ夫人にとっては姦通であり、バルザックが現世的秩序を無視しえない限りこの世では愛を断念するという結論しかでてこない。バルザックが描いたのは結局、はじめから不可能と分っている愛のための闘いである。そして、このことは、精神の最後の勝利というはるかな地点をめざしての闘いにおいて、バルザックが焦点をあてたのは、そこへ辿りつくことよりも辿りつくまでの過程であることを示している。バルザックにとって重要なのは「闘い」ということ自体であり、バルザックのすべての二元論は、闘って勝利を得るといふ *héroïsme spirituelle* のあらわれである。愛においても、次々とおかれる障害に対して魂はたえず緊張した状態で闘うのである。カトリック教は最後の関門をしいてそれを乗り越えてきたものを祝聖し、その姿を崇高なものとする。カトリック教は、ここではバルザックの美学の最も *romanesque* な要素となった。¹²

欲望の理想化は *amour angélique* の夢が入りまじってくるにおよんで一層詩的な姿になる。理想の愛は、男女ともに、最も神に近い人間の姿である天使的人間である時にのみ実現されるものと考えられた。

「彼にとって純粹な愛とは（……）、二つの天使的天性の邂逅であった」（ルイ・ランベール）

しかし、天才的な思想家ルイ・ランベールは、夢みた愛が成就しようという前後、欲望におし流されて発狂してしまう。両性の完全な融合をとげて「この世に足をおき天国へ」とびかえる時を待っている

天使」となったエチエンヌとガブリエルの愛は（「呪われた子」）十六世紀の物語であるが、父親の冷酷な言葉にうちくだかれて死ぬことによって、天使性のこの世に住みたいことを示すのである。短篇「マツミラ・ドニ」に於てのみ実現された理想の愛を描いて、バルザックの愛の探究は人間性の問題の困難を解決しえぬまま神秘的両性具有者の神話「セラフィタ」の世界へ飛躍し、宗教の中へとけこんでいった。バルザックの宗教はさまざまな宗教をもちこみ複雑な性格を示しているが、夙くから彼の内にあったさまざまな神秘趣味を統合して、*Comédie Humaine* の単一構成の世界を最終的に完成するのはスエーデンボルグの *illumination* であり、バルザックは愛の探究を通してそこにたどりついたのである。その意味でバルザックは、真に詩人であったといえよう。

バルザックが描いた愛の「不可能なる愛」という性質、女性を、人間を神のもとへ導くための神性のあらわれ「天使とする考え方」は、*amour courtois* との類似が認められる。*Comédie Humaine* の恋愛至上主義者たちは、事実 *amour courtois* への憧れを口にしてゐる。ルイーズは「ル・シッド」、「アストレー」などをモデルにして自分の愛を *amour courtois* に似せようとした。モルソフ夫人とフェリックスの場合は、清らかな真摯な愛が必然的にそこへ向っていった。*amour courtois* についてドニ・ド・ルージュモンはその宗教的性格を重視している。¹³ それはキリスト教と神秘異教との相剋ということである。西欧に古くから伝わる神秘教（ドルイド教）はプラトン以後東邦の神秘教とも結びついて西欧精神の大きな源泉となった。それは、プラトンのエロスに象徴される、死という現世否定を前提とした彼岸への渴望であり、女性を神の使と崇め、肉欲、結

婚を罪惡視するものであった。キリスト教が伝わり君臨するようになったとき、キリスト教の強い結婚の掟に反発した人々は神秘教に隠れ家を求めていった。キリスト教の弾圧下にその一異教となった神秘教はやがて宗教として存在できなくなり、神秘教の大きな地盤であった南仏の地で amour courtois に変身した。amour courtois は西欧の愛の原型であるが、こうした宗教的意義をもたない以後の世紀にはただ形ののみうけつがれていった。▲十三世紀より現代に至るまでの偉大なる文学にあらわれた恋愛の情熱の歴史、それは騎士道の神話の「世俗的」生活への墮落の歴史に他ならない▼とルージュモンは云う。彼は、ドイツ・ロマン派の詩人たちにのみ眞の amour courtois への回帰を認めた。バルザックにおけるドイツ・ロマン主義の影響は、バルザックの愛を amour courtois に近づける役割を果たしたものであろうか。だが、ルージュモンによれば、バルザックの場合も神話の▲墮落▼である。キリスト教の結婚への反抗、現世否定による彼岸の愛への飛躍ということほど、バルザックから遠いものはない。Comédie Humaine の愛のすべてに挫折と失敗の烙印をおしたのは、バルザックの、強烈な現世肯定の方向であった。

5

「二人の若妻の手記」以後、バルザックの描く愛は、以上に述べてきたことのくりかえしであり、愛の否定と romantique な夢想との間を彷徨し続けるが、次第に Pessimiste な色あいを濃くしていった。「従妹ベット」は、バルザックが描いた愛の最後のすがたである。ここでは三組の男女が、バルザックの愛に対する考えをあらわしている。ヴェンツェスラス・オルタンス、芸術家志望の青年の野

心と才能を殺した上に築かれた愛と結婚の幸福。ヴィクトラン・セレスチヌ、理想から遠い妻に目をつぶって政治に志す青年の、愛の情熱をあきらめた権力欲望。ユロ・ユロ夫人、天使的な女性の猷身的な気高い愛情が夫の幸福にはならず、裏切られ続けて死んでいく無力な姿。いずれの場合でも、バルザックの口調には暗いものがある。理想の愛の探究は、自らの理想に欺かれたオノリーヌにおいて、断念し放棄されたようであるが、七十才をこえて天使的な妻の側にとどまることができず肉欲の世界をさまようユロの姿に、より一層あきらかである。

▲偉大な作家、芸術家、発明家が一国の中にまれなように、男の広大な互いに相反する二つの欲望を満足させる女も、女の中にまれにしかない。偉大な男も愚かな男も（……）等しくみな理想の女と歡樂の女の必要をあわせ感じ、かの神秘的両性具有者——多くの場合生憎なことに二巻本となっている、この珍しい動物を探しにいく▼
更に苦い口調でバルザックはつけ加える。

▲かかる探索は墮落であるがその罪は社会に帰せられるべきだ▼

だが Pessimisme がすべてではない。ユロの、障害に出会うごとに、年を重ねることにはげしくなりまさるばかりの情欲の姿は、さまざまの情念、事件の入り乱れうずまく中で壮大なまでにそびえ立っている。ユロの足の向うところ、妖艶なマルネフ夫人を始め Comédie Humaine の名だたる娼婦たちが、官能のむせぶような、詩情をきわめた美しい姿をあらわす。ここに、▲欲望は地上の愛の欠陥▼といったバルザックを認めることができるだろうか。

美しい愛の夢の後にやってきた Pessimisme と官能の世界。「従妹ベット」には、晩年のバルザックの生活が反映しているのかもしれない。¹⁶それは、遠い昔すでに満たされることの不可能を予感してしまったほど強い愛の欲望を、回想（ベルニー夫人）と長い期待（ハンスカ夫人）との生活のうちにますます肥えかちらせていった真のエロスの子の最後の声であった。

《私はエロスの中に、エロスが、男爵を家庭の義務から遠ざけたように作品から遠ざけた、バルザックの姿をよるこんで認めよう。(……)「従妹ベット」の世界は、エロスの犠牲者たちの世界である》¹⁷

- 註 (1) Geoffrey Atkinson : Les Idées de Balzac t. 5, p. 34~56
 (2) ホーボワール「第二の性」(新潮文庫) IV (女の歴史と運命) p. 192~200.
 (3) Les Martyrs Ignorés-Oeuvre Ebauchée. (Pléiade.) t. X, p. 672
 (4) Avant-Propose de la Comédie Humaine, (Conard.) t. I,
 (5) F. Marceau : Balzac et Son Monde pp. 244~263
 (6) Etudes Philosophiques de Théophile Gautier. 特別 Oeuvre Ebauchée de Les Martyrs Ignorés に詳しく扱われている。
 (7) ex. 「31人組物語」・「従妹ベット」
 (8) 「結婚の生理学」(Pléiade) t. X, p. 883
 (9) A. Billy : une Vie de Balzac t. I, p. 47
 (10) 作品例「ルイ・ランベール」(1832~35)「ランシエ公卿夫人」(1833~34)「谷間の百合」(1835)「セラフイタ」

- (1835) 「呪われた子」(1836作の部分)「ベナトリックス」
 (1839) 「浮かれ女盛衰記」(1839) 「マミシット・ドニ」
 (1839) 「ボエームの王」(1840)
 (11) Lettres à l'Etrangère, t. I, p. 377
 (12) Ph. Berant : Balzac, l'homme et l'oeuvre, — l'Utilisation Esthétique et Romanesque du Catholicisme, p. 123~145
 (13) Denis de Rougemont : L'Amour et l'Occident 鈴木・川村訳・愛について(岩波書店) p. 71~206
 (14) ibid., p. 249
 (15) ibid., p. 323~329
 (16) Gaétan Picon : Balzac par lui-même p. 51~81
 (17) ibid., p. 79, p. 80
 (全般的に、クルチウス・バルザック(長谷川玖一訳)建設社)を参考にしました)